

「礼拝で起きていること」

ルカによる福音書 第7章 36節～50節

説教 本庄侑子伝道師

今日の聖書箇所には、ファリサイ派のシモンと罪深い女という2人の人物が登場しています。シモンは、神様に受け入れられるために律法を厳格に守る指導者でした。一方、罪深い女はおそらく娼婦で、律法を守らないこの女は、人々からだけでなく神様からも見捨てられていると考えられていました。罪深い女がシモンの家に来てくるといのは、本来起こりえないことです。しかし女は、どうしてもイエス様にお会いしたかったのです。

この頃、イエス様がしきりにお訪ねになっていたのは病人たちでした。病人たちは、この女と同じく人々から軽蔑され、神様からも見放されていると考えられていました。病気の体では厳格な律法を守ることなどできません。神様がいたとしても、律法を守れない私はどうせ見捨てられている。そう諦めて生きていました。しかしイエス様が真っ先に向かったのは、そんな病人たちでした。そのお姿は女の人生を激しく揺さぶりました。

女はイエス様のもとに高価な香油を持って出かけていきます。イエス様の歓心を買ひ、同情を誘って救っていただくためではありません。神様の愛は罪深い私の身にも及ぶのだ。そう信じる信仰に導かれ、いてもたってもいられなくなったのです。イエス様は女に宣言なさいました。「あなたの罪は赦された」。(48節)

聖書が語る《罪》の中心は、私たちが何をしたか、しなかったかにではなく、神様が愛してくださっている、というたった一つの事実を知らないことにあります。病人を訪れるイエス様のお姿は、神様の愛が女の身にも流れ込んでいたことを知らせ、大胆な愛の行為を生みだしました。女の行為自体は狂気じみたものだったかもしれませんが。人の目にはさぞ異様に映ったでしょう。イエス様が嬉しかったかどうか疑問です。しかし、イエス様はその行為を生んだ女の愛をお喜びになり、じっと動かず、最後までお受け取りになりました。

この出来事はシモンに不快な思いを与えました。娼婦が異常な行動を取っているにも関わらず、なされるがままにしておられるイエス様は、教師とも預言者とも言えない姿に映ったのです。

シモンは強く優秀でした。律法を厳格に守れる健康な体もありました。しかし、自分が律法を守ることによって神様に受け入れられる、と信じるシモンの人生に、実は神様の出番など

ありませんでした。神様などいなくても自分でやれる余裕があったとも言えるでしょう。神様を閉め出すシモンは、律法を守る余裕のない一人の女の人生をも閉め出し、否定しました。優秀さ、健康な体を、自分や人に認められるために使って、目の前にいる一人の女を助けるためには使えませんでした。シモンもまた、神様と人から遠く離れた、孤独で罪深い男でした。

イエス様はシモンに名指して呼びかけ、特別にたとえ話をなさいました。2人の人が借金をして2人とも返せなかったので、金貸しがそれぞれを帳消しにした、という話です。借金額は一人が500デナリオン、もう一人が50デナリオン。イエス様はシモンに問いかけます。借金が帳消しにされたとき、どちらが多く金貸しを愛するだろうか。シモンは答えます。「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」。(43節)

正しい答えを言ったシモンにとって、この話は痛烈に響いてきたことでしょう。目の前には、我が身を忘れるほどにイエス様を愛する女の姿があったからです。罪が帳消しにされた、言い換えれば、神様の方から距離を埋めて自分の所に来てくださった、という事実を打たれ、愛が生まれたのは、神様も人も閉め出していたシモンではなく、神様からも人からも見捨てられていると思い込んでいた女の方でした。

「あなたの罪は赦された」。この言葉は無責任に放置されませんでした。宣言なされたイエス様ご自身が十字架につけられました。神様との距離を埋めることなどできない、神様から離れていることを認識することさえできない私たちのために、神様はイエス様を遣わし、私たちの所に来てくださいました。

私たちは今朝、イエス様の足元でイエス様を愛しています。ここには罪深い女がいます。強く優秀なシモンもいます。どちらも、イエス様の十字架と復活によって取り戻された神様の子どもです。神様は、教会の礼拝において、世界が閉め切っているベールを引き裂き、私たちが立ち入らせまいとしている心の闇にまでやってきて、ご自身の愛を知らせ、新しい歩みへと送り出してくださいませ。あなたは罪深い女ではない、シモンでもない、私の子だ。

「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」。(50節)

(記 本庄侑子)